

中国のほんの話 (27)  
インターネット文学の彗星  
安妮寶貝と木子美  
蔭山 達弥

インターネット文学思潮は、1990年代後半、中国で新しく興った文学思潮である。インターネット文学は文学と「第四の媒体」と言われるインターネットが有機的に融合した産物であり、鮮明に時代の息吹を伝えてくれる。

現在、中国のネット人口は急速に増加している。中国インターネット情報センター(CNNIC)の数字によると、1997年に中国国内でインターネットを使用したのは僅かに62万人であったが、2年後の1999年7月には400万人を突破、2002年には4580万人、現在では、8000万人を超えるといわれる。ネット人口は日本を超え、アメリカに次ぐ多さである。ネット使用者は35歳以下が80%以上を占めているが、特筆すべきは女性使用者の比率の上昇である。

インターネット文学の始めは海外華人が創刊したネット文学雑誌である。1998年、最初の代表的な、影響力が大きい中国語ネット小説『はじめての仲むつまじい接触』(第一次的亲密接触)が登場した。このネット恋愛小説は、ネット生活と現実生活の真実の体験を描き、ネット使用者だけがよく知っている「ネット用語」を使用している。筆使いも繊細で、感情はうそ偽りがなく読む者の心をつ。この小説はネット上の『タイタニック号』と呼ばれ、台湾で映画化され、大陸でもベストセラーになった。

同じ年、ネット上に小説を発表して、名声が急速に高まったのが、安妮寶貝である。安妮はAnnie、寶貝はbabyという意味深長なペンネームを持つ蟹座生まれの女性は、上海で5人の女性と「ガジュマルの木の下」(榕树下)というサイトを運営し、現在は北京に在住している。彼女の作品は一貫して控えめなうら寂しいスタイルに固執し、宿命と無常、

愛と死、別れと流浪を解釈している。アイルランドの音楽が大好き



きな彼女が2002年に出版した『薔薇島嶼』(Island of briar)は4冊目になる作品集で、上海・北京・香港・ベトナム等の旅行中に彼女が撮影した写真と書きとめられた文字で溢れている。彼女はこの本の序の中で書いている。

私たちは自分の手の中の時間があとどれくらい残っているか永遠に分かりっこない。生命は幻覚にすぎない。あなた知ってる？

昨年末、突如現れた女性ネットライター「木子美」に中国のインターネット愛好者たちは釘付けになった。「木子美」はハンドルネームである。彼女はblogと呼ばれるネットコミュニティ上で自らの性体験を惜しげもなく公表し、中国社会に大きな波紋を呼んだ。男性歌手との一夜の情事を綴った『遺情書』は昨年12月に出版されたが、発売当日にして発禁処分を受けた。しかし、海賊版が次々と登場し、部数は30万部を超えた。

私たちはいつも考えている。愛情の妙業と苦痛の代価の間で考えている。／

それから、一夜限りの情事が生じた。／それから、彼の家のソファでメイクラブした。／それから、私たちはたくさんの電話を入れ、噂が至るところに広まった。／

それから、彼の彼女は家から三度出て行った。／それから、彼は完全に消えた。

「木子美」の登場はネット社会の拡大と人々の性意識の変化がもたらした騒動といえよう。

かげやま たつや (助教授・中国文学)